

# レンズ を通して

連載「十月」

写真文 | 高田宮妃久子殿下

## タンチョウ

ツルの中でも大型で、全長は125〜152センチ、翼を広げると240センチにも及ぶ。絵画ではよく尾が黒く描かれるが、黒いのは次列、3列と呼ばれる風切羽、つまり翼。尾は白。両側にいるのが若鳥。タンチョウはこのように家族で行動する。



# 日本の鶴に思いを馳せて

写真・文 高円宮妃久子

「鶴は千年、亀は万年」——長寿のシンボルであるタンチョウは、亀や松と一緒に描かれることが多く、中でも、松の枝高くに営巣する姿の「巢籠もり鶴」は縁起の良い図柄とされています。しかし、実際のツルは湿地帯に営巣し、草の間に身を潜めて卵を温め、雛を育てます。樹上に巣をつくるのはコウノトリ。きつと首が長く、背の高い白と黒の鳥、ということと一緒になってしまったのでしょうか。外見で目立った違いは頭の赤。「丹頂」の「丹」は朱色という意味で、「丹頂」は頭頂部が赤いことに由来する名前です。この赤が雪に映え、冬の釧路湿原で見られる求愛の舞をいっそう美しく演出します。この観る者を魅了する雪の中のツルの姿もいのですが、今回はあえて秋のタンチョウをご紹介します。

明治の中ごろまでは北海道で繁殖し、関東地方に越冬のためにやって来る渡り鳥でしたが、乱獲で数が激減。一時は絶滅したと思われていました。釧路湿原でひっそりと暮らす十数羽が発見されたのは大正12年(1923年)のことです。地元では餌付けなどで保護を試みましたが、タンチョウは警戒心が強く失敗に終わりました。この努力は食糧難であった戦後もすぐに再開され、とうとう昭和27年(1952年)に最初の餌付けに成功。少ない食べ物を分け与え、ツルと共に暮らした地元の人々の温かい気持ちが伝わってきます。

現在、北海道に生息するタンチョウの数は1200羽を超え、ようやく絶滅危惧Ⅱ類となりました。しかし、喜んでばかりはいられません。数の増加の主な理由は冬の間の給餌。与えられた穀物の味を覚えたタンチョウは小麦の穂やデントコーンの新芽などを食べあさる上に、体重もあるため作物を傷めます。農家にとつての損害を考慮しなくてはなりません。また、警戒心が薄くなり、電線のみならず電車や自動車に衝突することもあります。環境保全、そして共存・共生とは本当に難しいものです。

地球は人間だけの棲み処ではありません。私たちが「自然を守る」というのもたいそう僭越な言い方で、自然は常に在ります。人類は地球上でほかの種を圧倒する分布を見せ、数の上でも主導的な存在です。生物の多様性を維持し、生態系のバランスを崩さないというマネージメントが要求されています。優秀な頭脳と豊かな心、日々変わる環境のあり方と真摯に向き合い、柔軟に対応していく能力をもっているはず。いかにその力を使うか、人類が賢いマネージャーであることを願わずにはいられません。



## タンチョウ

早朝、薄暗い中、川の辺のねぐらを飛び立つ親子。湿原に棲み、水辺の草やタニシ、ドジョウなどを食べるが、冬の餌のない時期には現在でも給餌している。自然に越冬できれば一番良いのであろうが、難しい問題。



## タンチョウ

*Grus japonensis* は「日本のツル」という意味。

この学名がついたころはタンチョウが

中国やロシアでも繁殖していることはわからなかった。

韓国や中国の長江下流で越冬しているものが

1300羽ほどいるらしい。

大陸では気候不順のため湿原が干上がり、

また、中国では相当部分の湿原がトウモロコシ畑などに

姿を変えている中、生息地の保全が緊急課題。